

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」事業報告書(3年次)

1 学校名等

学 校 名	綾部市立何北中学校				校長名	布川 貢義
研 究 主 題	地域に学び、地域に貢献し、夢を実現する生徒の育成 ～課題解決型の学習を通して、認知能力と非認知能力を一体的に育む教育活動～					
研究の目的	「主体的に学ぶ力」「人と関わる力」「想像する力」の弱さという課題を克服するために、正解のない問いを的確に捉え、自ら学びを計画し、他者と協働しながら学ぶ経験を積ませることが必要だと考える。そのために認知能力と非認知能力を一体的に活用して課題を解決する課題解決型の学習を軸とした取組を実施し、主体的に学び、仲間と協働し、自分の考えを豊かに表現する力や挑戦する力を育成する。					
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	1	1	1	1	4	13
生 徒 数	14	16	11	1	41	

10(1)

2 研究校の概要

(1) 生徒の実態と研究課題

人間関係の希薄さや、生活の中での満たされなさ等を抱えている生徒が多く、自己肯定感が低い。与えられた課題には一生懸命取り組むことができるが、自分たちで課題を見付け、主体的に課題解決していこうとする力は弱い。そのため、他者と協働して課題を解決していく力や、自分の考えを豊かに表現する力をさらに付けていく必要がある。また、全国学力・学習状況調査や学びのパスポート、校区独自で継続して行っている「何北ブロックいきいきふれあいアンケート」の結果等からも、「主体的に学ぶ力」「人と関わる力」「想像する力」に弱さが見られ、自己調整力の低さも課題である。

研究指定が3年目となり、これまでの2年間の成果と課題を踏まえ、生徒の実態に合った、課題解決型の学習を通して、「学び」を深め、認知能力と非認知能力を一体的に育もうという考えのもと、研究を進めた。

(2) 研究体制

校内研修で課題解決型の学習の研修を行い、各教科や領域で、全教職員がこの手法を取り入れた授業ができるように努めた。また、日々の授業に生かすための校内授業研究会も行った。

さらに、今年度は、特別支援教育の視点を活かした授業づくりについての校内研修も行い、誰一人取り残さない授業を行っていくための様々な手法等について、学ぶことができた。今後は、教職員間で共通確認したことをさらに深く実践していくことや、学年や教科をまたぐ系統的な計画を立てていく必要があると考える。

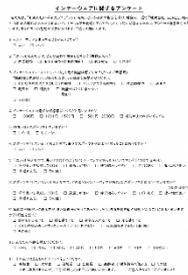
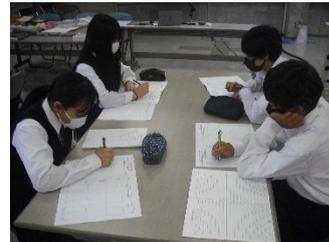
3 主な研究活動

グンゼ株式会社から与えられた「10年後の時代に合ったこちよいインナーウェアを創造してください」という課題を解決するために、1年間、様々な情報収集や課題分析に取り組んできた。「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」での発表を2年生のゴールとし、「何北ドリカム DAY (何北ブロック一貫教育合同会議参観日)」での発表や、綾部市独自のキャリア教育の取組である「中学生“みらい会議”」ともリンクさせ、実践を進めた。

【2年生のおもな活動】

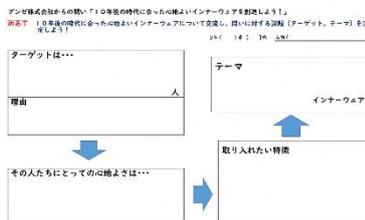
(1) 5月

10年後の時代をイメージし、アイデア出しを行った。5月31日(金)に「神戸芸術工科大学」を訪問し、グンゼ株式会社からの課題解決に向けて、多様な繊維や特殊なテキスタイル等について学んだ。また、アンケートを事前に作成し、大学生に対してアンケート調査を行った。



(2) 6月～7月、9月

10年後の時代を予想するアンケート結果をもとに、グループとテーマ・ターゲットを決定した。その際、ワークシートを使用して意見を出し合い、具体的なイメージを膨らませた。テーマ・ターゲットが決定した後は、グループごとに分かれ、実現可能なインナーウェアの創造に向け、プレゼン資料の作成に取り組んだ。



(3) 10月～11月

「何北ドリカム DAY (何北ブロック一貫教育合同会議参観日)」において、取組を通して自分たちが付けた力や、その活動内容(中間報告)を発表した。その後は、引き続き、インターネットや資料等を活用して情報収集・分析を行い、テーマ・ターゲットに関する考えを深めていった。また、自分たちの考えを裏付けるためのアンケートを作成した。



インナーウェアに関するアンケート
 岐阜県立岐阜高等学校は、
 私立高校「着るの強いチカラ」(着る力)という研究テーマを、
 授業の一環で「着るの強いチカラ」(着る力)という研究テーマに合わせた
 インナーウェアに関するアンケートを実施しています。多くの皆さんの意見が大切です。ご協力の程、よろしく
 お願いいたします。

インナーウェアに関するアンケート



岐阜県立岐阜高等学校

(4) 12月

考えを深めたテーマやターゲットについて、より専門的・客観的なデータを得るため、12月10日(火)に「びわこ成蹊スポーツ大学」を訪問し、渡邊准教授の講義を聴かせていただいたり、大学生にアンケート調査をお願いしたりして、資料作成にあたってのヒントを多く得た。アンケートは、「びわこ成蹊スポーツ大学」の大学生だけでなく、近隣の高校に通う高校生や高齢者・介護施設等で働く方々や入所者、利用者にもお願いし、多数の客観的な意見をいただいた。(計200名)

12月16日(月)と19日(木)には、グンゼ株式会社の方々にも各グループの発表を見ていただいた。その後、グループごとに直接アドバイスと励ましの言葉をいただき、違った視点からもう一度課題を捉え直したプレゼン資料を完成させた。また、冬休みには各々で発表練習を行った。



(5) 1月～2月

「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に向けた最終調整として、代表グループ以外の生徒も、自分たちが予選審査で評価していただいた点を、代表グループの発表に取り入れて発表原稿をより良くできないかどうか推敲を重ねた。

また、2月4日(火)には、綾部市主催の「中学生“みらい会議”」にて、代表チームが1年間の取組の成果を発表した。そして、2月15日(土)には、「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に2年生全員で参加し、代表チームが1年間の取組の成果を発表した。



【1年生のおもな活動～今後につなげるために～】

(1) 1月

福知山公立大学を訪問し、キャリア教育の視点で、大学職員の方から今後の進路についてのお話をいただいたり、卒業を控えた3名の大学生から、今までのキャリアや進路選択のときに考えたことなどを話していただいたりした。課題解決型の学習の手法を学ぶため、「地域で大学生と中学生が関わって実践する多世代交流活動」を考えるコミュニティーデザインのワークショップを4グループに分かれて行った。6名の大学生にも入っていただき、地域の魅力や活動のアイデアなどを付箋に書き出し、グループの意見をまとめた。



4 今年度の研究の成果と検証（生徒、教職員、学校、家庭・地域社会の変容等）

(1) 認知能力の向上に関して

「未来の担い手育成プログラム」と「何北ドリカム DAY（何北ブロック一貫教育合同参観日）」、「中学生みらい会議」を連動させて取り寄せたことで、一度切りで発表が終わるのではなく、さらに熟考したり、励ましや助言をいただいたりする機会が増え、より良いものにしようと努力することができた。また、課題解決型の学習の手法を学ぶことで、自分の意見を伝えたり、他者の意見を聞いたりする機会が増え、協働して課題を解決するという主体的で探究的な学びにつながる学習機会を作り出すことができた。特に、前年度研究の中心となった現3年生は、体育祭の色表現の構想や、文化祭演劇の話し合いの場面において、主体的・意欲的に活動し、1年間で付けた力を発揮する姿が見られた。

(2) 非認知能力の向上に関して

2年生での1年間、「未来の担い手育成プログラム」の取組におけるプレゼン資料の作成や、校内での各種委員会活動、生徒会活動等、役割を数多く与え、目的と意義を明確にして取り寄せたことにより、様々な活動に自信を持って取り組めるようになった。そのことで、年度当初、本校の課題でもあった自己調整の力が育まれ、目的意識を持ってリーダーの仕事にも携わることができつつある。認知能力と非認知能力を一体的に育むため、総合的な学習の時間等で付けた力を教科等の学習にも落とし込み、目的意識を持って学習に取り組めるよう、今後も支援していく。

5 今年度の課題

今年度の課題は、「主体性」と「伝える力」である。改善の手立てとして、聞き手を意識した表現活動（話し方や伝え方など）について、総合的な学習の時間のみならず、各教科・領域のなかで長期的にアプローチをしていく必要がある。また、与えられたことをこなすだけでなく、プラスアルファで何が必要かを考えさせ、課題解決に意欲的に取り組ませるための仕掛け作りも必要である。（例：定期的な校内でのリーダー会議、学校を越えた生徒間交流等）

6 来年度の研究構想

- (1) 課題解決型の学習の手法を用いた学習機会を、教科・領域で意識的に持つようにする。また、特別支援教育の視点を意識した授業づくりを全教職員が共通して行う。
- (2) 質問調査やアンケート調査で数値化した効果検証を、継続して行う。
- (3) 情報収集や活用できる能力が学びの主体性につながり、自己の生き方を考えることのできる総合的な学習の時間や各教科の在り方について考えていく。